本サービスにおける著作権および一切の権利はアイティメディア株式会社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスの出力結果を無断で複写・複製・転載・転用・頒布等をすることは、法律で認められた場合を除き禁じます。

世界を「数字」で回してみよう（48） 働き方改革（7）：

女性の活用と、国家の緩やかな死

http://eetimes.jp/ee/articles/1804/24/news047.html

今回は、「働き方改革」の中でも最難関の1つと思われる「女性活用」についてです。なぜ、このテーマが難しいのか――。それは、「女性活用」は、運用を間違えれば、国家の維持（つまりは人口）にも関わる事態となってくるからです。

2018年04月25日 11時30分 更新

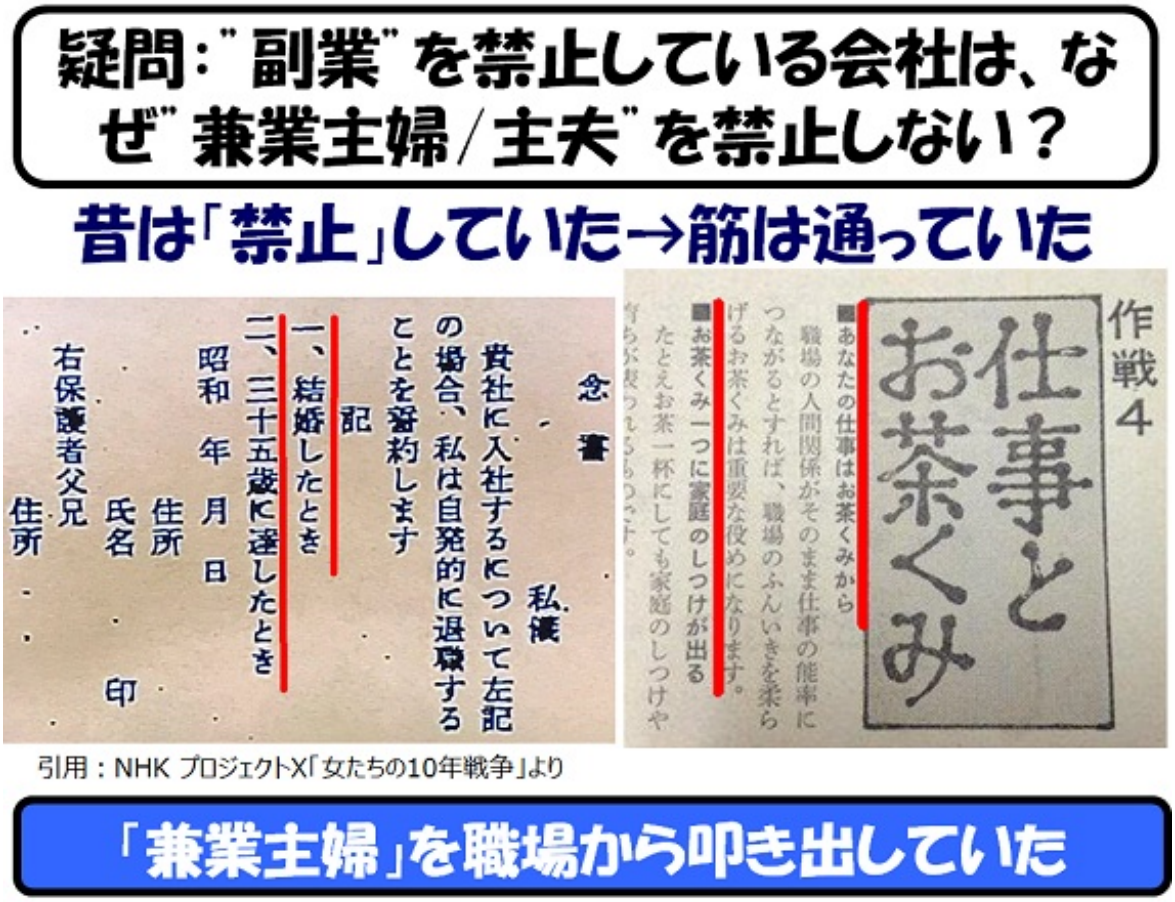
[江端智一, EE Times Japan]

「一億総活躍社会の実現に向けた最大のチャレンジ」として政府が進めようとしている「働き方改革」。しかし、第一線で働く現役世代にとっては、違和感や矛盾、意見が山ほどあるテーマではないでしょうか。今回は、なかなか本音では語りにくいこのテーマを、いつものごとく、計算とシミュレーションを使い倒して検証します。⇒連載バックナンバーはこちらから

後輩からレビューを受けた時のことです。

後輩：「江端さんは女性の労働問題（「女性活用」）を、男性を中心とした作られた企業や組織にあると見なしているようですね」

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.



引用:NHK プロジェクトX「女たちの10年戦争」より

と、後輩は前回のコラムの原稿を見ながら言いました。

江端:「そうだけど?」

後輩:「もちろん、それは間違っていませんが、その観点だけ見ていると、いつまで立っても解決方法は見えてきませんよ」

江端:「と、言うと?」

後輩:「例えば、戦後の日本は、夫を戦争で失った妻や子どもを守ってきたという歴史があるのですよ。『母性保護をしなければならない』という必死の施策や体制があったことを含めて考えないと、その辺の『社会が悪い、政治が悪い』と叫んでいるだけの、頭の悪い記事と差別化できませんよ」

後輩の話を聞きながら、私はイスラム教の「一夫多妻」のことを思い出していました。

イスラム教は、その教義に、布教のための戦争(ジハード(聖戦))を含んでおり、それ故、戦死者とその戦死によって残された妻(寡婦)やその子どもの養育も、ジハードと一緒に考えておく必要がありました。

「男1人に、女性4人まで妻帯がO.K.」とされているのは、男性優位主義のハーレムの「権利」―― ではなく、「戦死していない男であるお前は、4人まではきっちり戦死者の寡婦と子どもを

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

養育しろよ」という「義務」から発生していることは、意外に知られていません。

　今回調べてみて分かったのですが、「女性活用」なるものは、今回の「働き方改革」が初出ではありません。過去にも、さまざまな取り組みがなされています。

　ところが、現在がその過去の積み重ねの結果であることや、そして、その取り組みは、今後どうなっていくか、という考察や検討は少ないです。特に、定量的な評価（数値データや計算）については、絶無といえる状態で ―― 今回は、その方針を立ち上げるところまでで、酷く時間がかかりました。

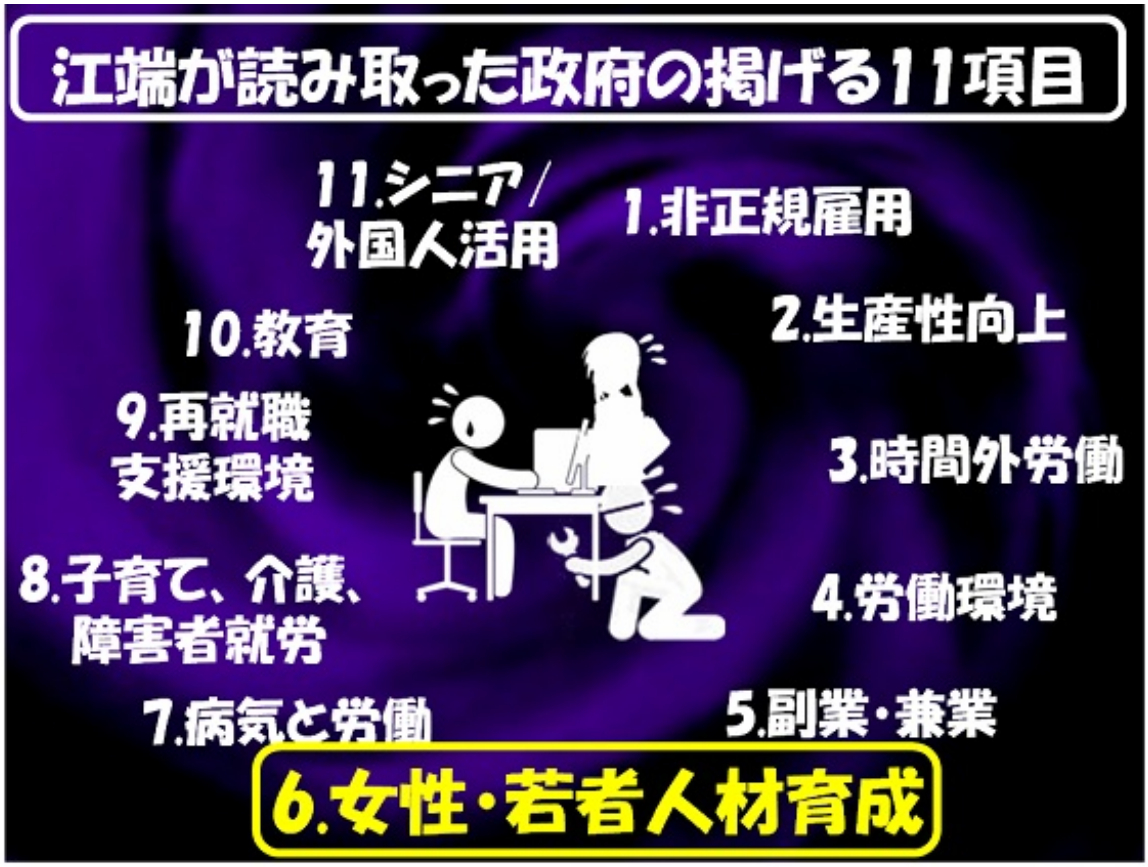
　一番の要因は、「私が女性ではない」ということです。

　今回のコラムは、データやファクト（事実）と計算だけで、「働く女性」の内面に迫れるか、という（私にとっては）大きな試みとなりました。

「女性活用」の歴史をさかのぼる

　こんにちは、江端智一です。

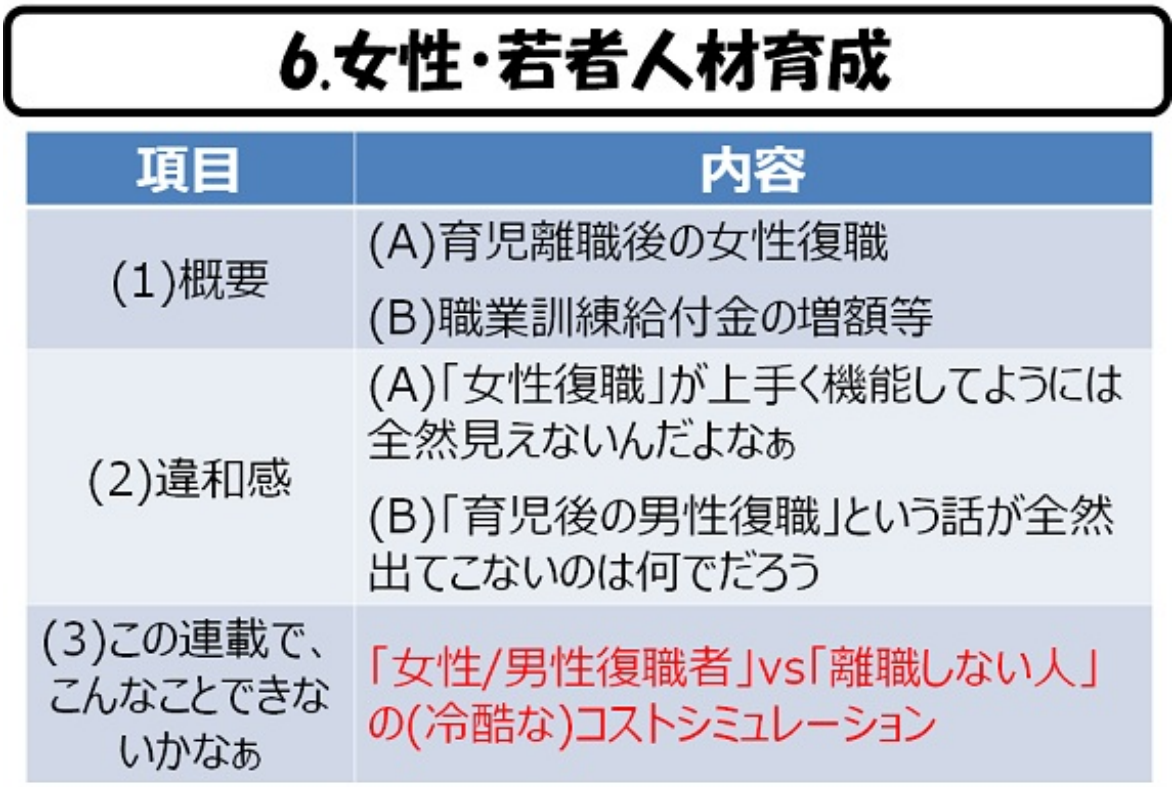
　今回は、政府が主導する「働き方改革」の項目の1つである、「女性・若者人材育成」の特に「女性活用」について考えていきたいと思います。



　政府が、「働き方改革実行計画」の「女性・若者人材育成」で掲げている課題（私が乱暴に理

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

解した範囲では）は以下の通りです。



現在、政府は「女性活用」を掲げて、いろいろな施策を上げて ―― そして、その多くは、あまりうまくいっていない ―― ように見えます。

で、今回は、（前述の後輩のアドバイスも受けて）この、女性の働き方が、どのように変化してきたか or させられてきたかを、明治維新までさかのぼって調べてみました。

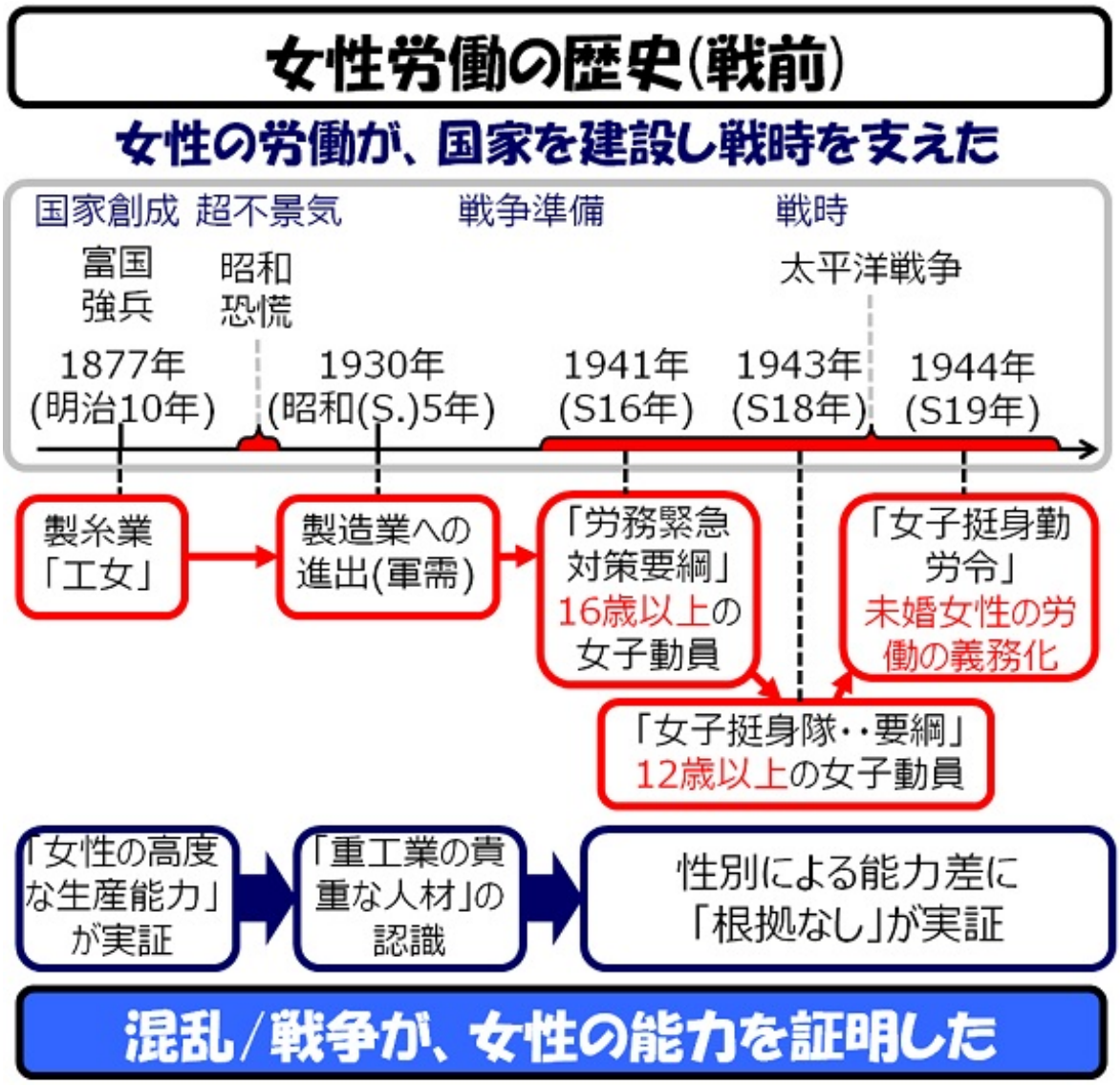
さらに、「女性の働き方」において最大の「問題」となり得る「子ども」（育児）というものが、何であり、どういう意味があるのかを、（忖度も愛情もない冷静な）エンジニア視点から考えてみました。

そして、「女性の働き方」という観点で見たところ、「キャリア」という言葉の意味が、本来の「キャリア」の意味とは違っているらしいことを説明したいと思います。

最後に、政府の主導する「女性の働き方改革」を、コンピュータでシミュレーションしてみたところ、どうやっても失敗してしまうという結果を数値で示したいと思います。

まず、明治維新から現在までを、太平洋戦争（1941年（昭和16年）～1945年）の前後に分けて、調べてみました。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.



明治維新の新時代を作ったのは、「るろうに剣心」の緋村剣心 ―― などではなく、女性の労働力でした。これは、当時の大蔵大臣である松方正義が「日本の軍艦は総て生糸を以て購入するものなれば、(後略)」と発言していたことからも分かるように、わが国は、女性工員が生産した生糸を輸出して、軍艦や重工業製品を購入していたのです。

しかし、米国ウォール街の株の大暴落から始まった世界恐慌が日本にも波及して「日本恐慌」となり、この結果、列強が弱小国を「喰いもの」にして生き残る「帝国主義」がさらに加速していきました。

わが国も「喰われる側」ではなく「喰う側」になるために、急激な軍備化が図られました。そしてここでも女性が活躍が国家を支えることになります。女性が、超高精度な制御や、安全性や耐久性を要求される、武器の生産に関わり、驚異的な高品質の兵器を増産していきました。

そして、太平洋戦争時においては、12歳以上の少女たちまでをも(そして、未婚女性は問答無用で)、兵器製造に投入し、運用していた事実から、「性別による生産能力の差」という考え方が全くナンセンスであるということを ―― その当時の国民は理解していたのです(多分、現代の私たち以上に、深く分かっていたはずです)。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

ところが、皮肉なことに、この太平洋戦争こそが、このパラダイムを一変させるきっかけとなったのです。

「サザエさん的家庭像」をベースにした成長戦略

戦後の日本は、戦死者（兵士だけでなく、非戦闘員の市民も含めて）、壊滅的な被害を受けました。戦後の労働力不足は、言うまでもありませんでした。そして、このままでは、女性や子どもが過酷な労働を強いられ、女性や子どもの労働災害（過労死）が多発することは目に見えていました。

そこで、わが国は先手を取って、この状態に入る前に「母性保護政策」を打ち出します。徴兵制によって徴用され戦死した兵士の妻（戦争寡婦）やその家族を、国家を上げて保護する方向に大きく舵を切ったのです。

さらに、その後の朝鮮戦争*)による戦争特需**)をきっかけに、日本の高度成長時代が始ま

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

ります（これが、どれほどケタ外れな経済成長ぶりだったかは、「誰も知らない「生産性向上」の正体 ～“人間抜き”でも経済は成長？」お話しました）。

＊）北朝鮮と米国の戦争で、現在も戦争は続いています（今は単に「停戦中」）
＊＊）在日米軍基地が朝鮮戦争の前線基地となり、わが国は、その戦争を支えるあらゆる物資を米国に提供していました（戦争しているのは米国であって、日本ではないので、（道義的にはどうあれ）憲法違反ではありません）。

この高度経済成長期において、政府は、経済白書で、この経済成長を支える国家の体制として、暗黙的ではありましたが、「性別役割分担」というドクトリンを提示します。

これは、「長時間労働、頻繁な転勤を無条件的に受け入れうる労働者」としての「夫」と、「家事、育児、介護などの無償の労働者」とすることを受け入れる「妻」を構成要素とする、「家庭」という「労働力のパーツ化」を図り、その代償として、雇用保証と被扶養者の年金制度などの特典を与えるというものです。そして、そのドクトリンは今も続行中と言えます。

つまり、「性別役割分担」に基づく無制限労働者である夫と無職の妻からなる家庭、いわば、『サザエさん的家族観』をベースとして、日本は高度成長時代を生き抜く戦略を選択したのです。

この戦略が「悪手でなかった」ことは、実質経済成長率10%、19年間連続達成という、イチロー選手や、錦織選手とは比較にならない偉業を達成したことからも明らかです（こんな比較は両選手に失礼千万とは分かっていますが、その凄さを実感していただきたいのです）。

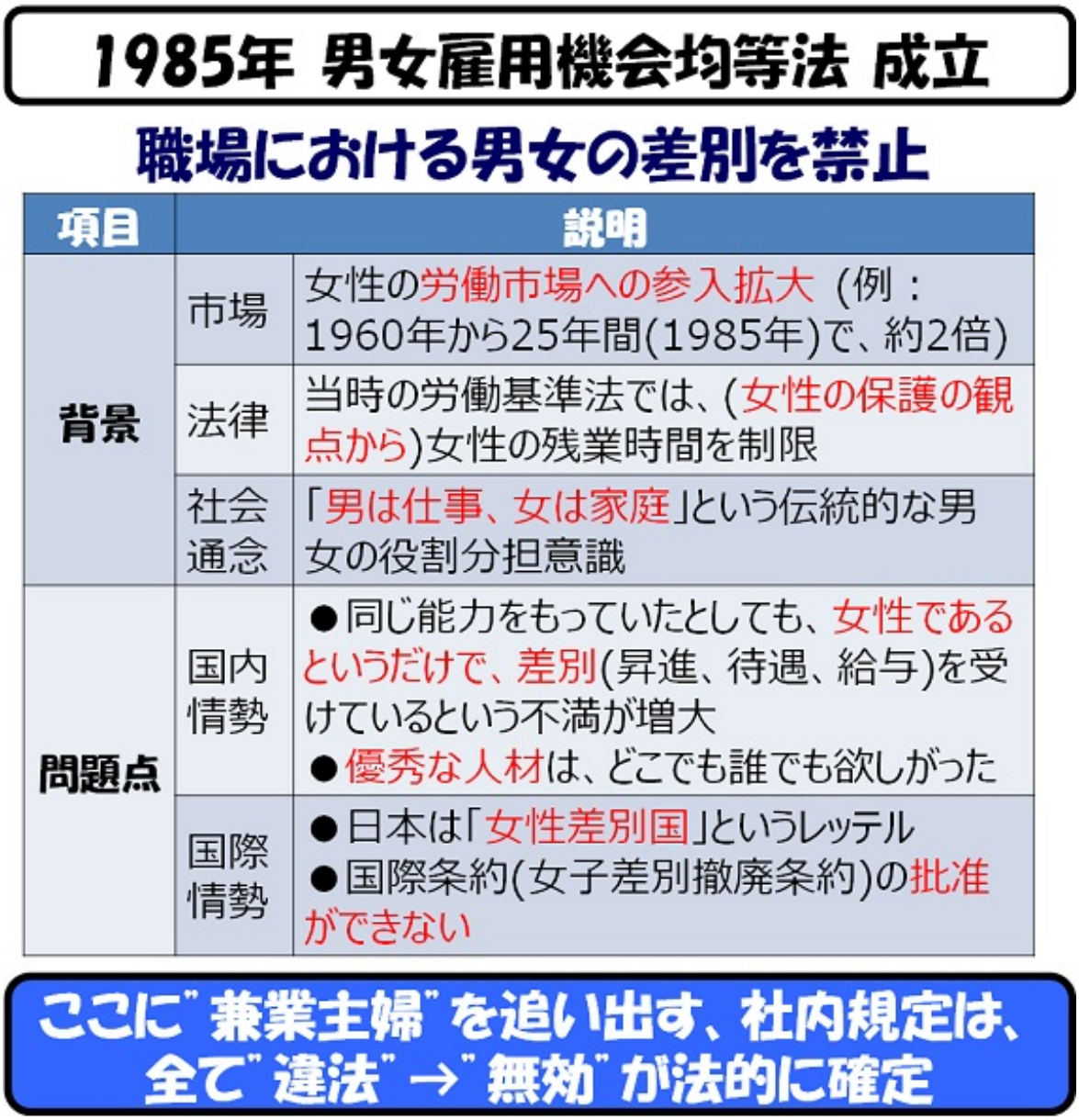
しかし、その後、その国民全員の「母性保護」や「高度経済成長」の政策の余波が、問題となるようになってきました。

まずは、冒頭の誓約書「35歳までに退職します」などの、「若年定年制」を規定していた会社との裁判がぼっ発しました。

1966年の「住友セメント結婚退職事件」で、退職しなかった女性を解雇した会社の敗訴が確定し、その後、山一證券、三井造船などの裁判で判例としては、ほぼ確立しました。しかし、1971年の段階でも、この「若年定年制」を採用していた会社は、日本国内で7%もありました。

1975年ごろに「女性の保護」と「女性の権利」の間で女性差別論がぼっ発し、そして、1985年の男女雇用機会均等法の制定をもって、法律的には決着がついた ―― ことになっています。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.



「政府vs企業で揺れる「副業」、労働者にメリットはあるのか」から再掲

しかし、これはあくまで法律的な（つまりトラブルとなった時の）解決手段であって、「女性の働き方」に関しては、法律では解決できない制度上の問題（結婚）と、生物学的問題（子どもの出産と育児）が、運命的にくっついてきて、そしてそれは、現在も解決されないまま、続いています。

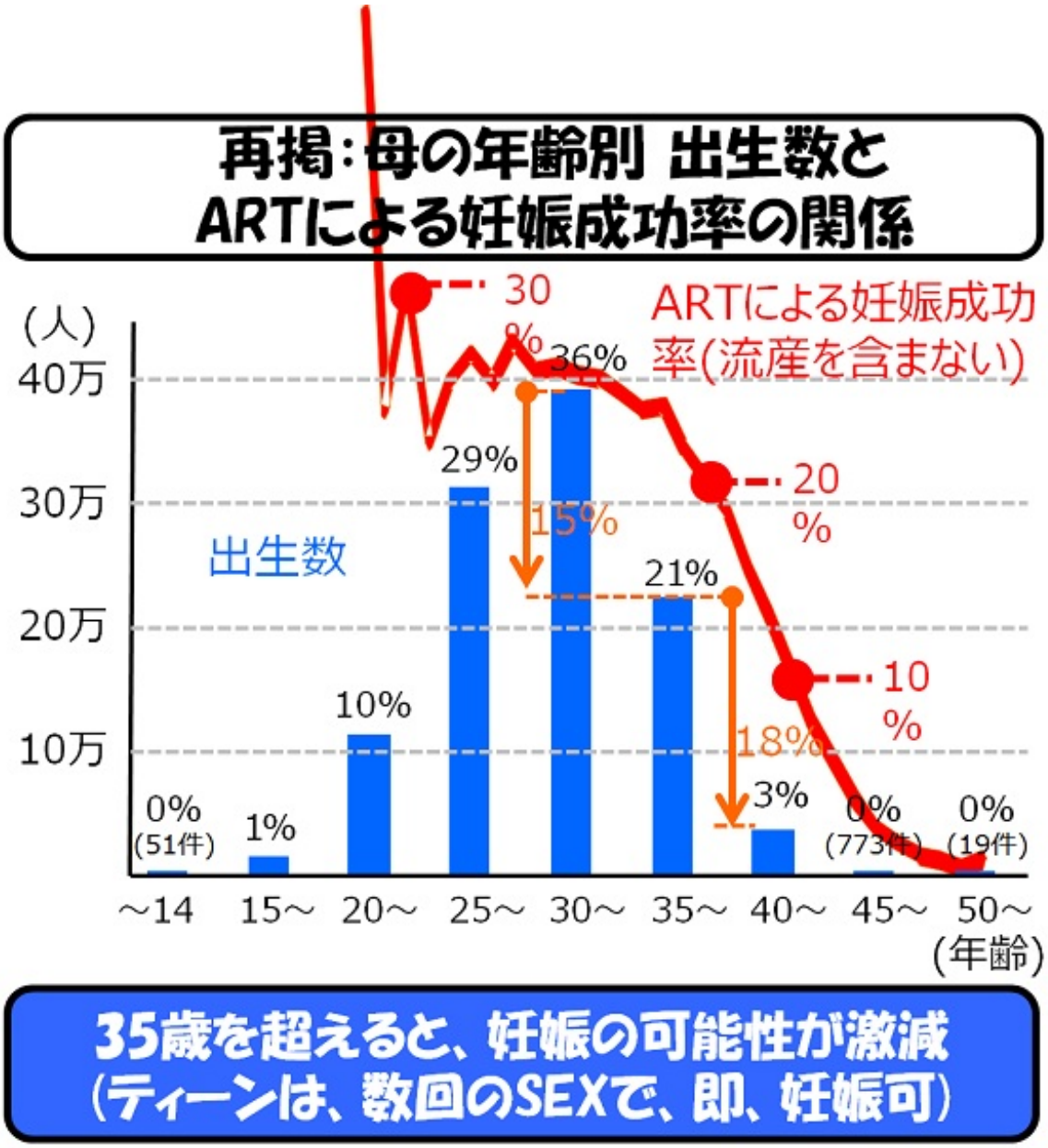
「女性活用」は、「女性を結婚や妊娠から遠ざける」のか

男女雇用機会均等法は、乱暴なまとめ方ですが、「母性保護」を弱めても、「男性と同等の労働権利を担保」する法律である、と言えます（もちろん、11条、11条の2の規定など、出産時の休業や、セクハラ、パワハラ防止規定もありますが）。

しかし、この法律が、「女性の労働の権利」を担保してくれるとしても、「女性の体のしくみ」まで変えてくれるわけではありません。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

これは、以前、私が調べた年齢別の妊娠成功率のデータです（かなりがく然としたのを覚えています）。



筆者が執筆した、他媒体の連載記事より再掲

「女性の妊娠に適した年齢は16歳くらい」と言ってたのが、アリストテレスだったかプラトンだったか忘れましたが、私の調べたデータでは「妊娠のしやすさ」に関しては、ティーンが圧勝です*）。

*）今は、未婚のティーンの女の子を妊娠させたら、淫行条例に基づき処罰されかねませんが（参考）

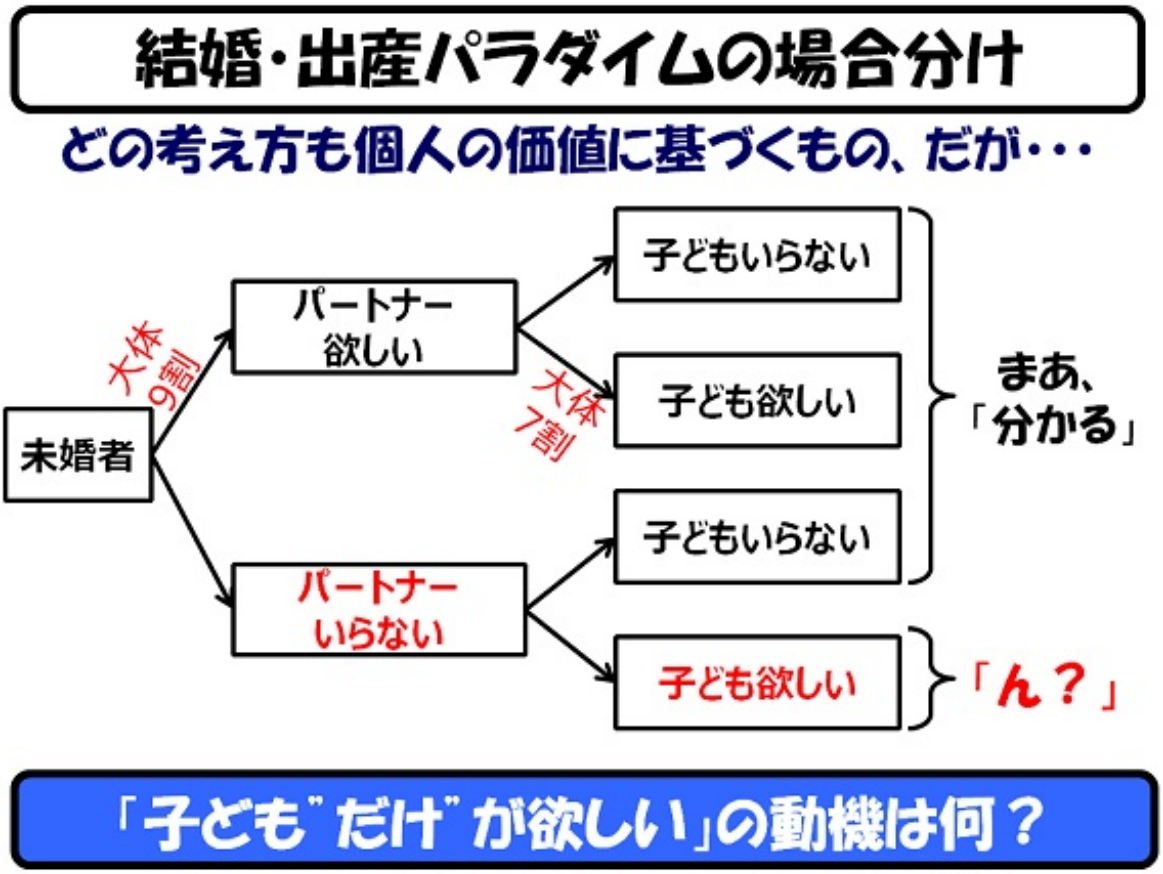
現在、女性の大学進学率は48.2%で、そのほとんどが就職しますので、当然、結婚年齢は高くなります。わが国では「結婚→妊娠ルート」が圧倒的多数ですので、結婚年齢が上がれば、出産年齢も上がり、その分、妊娠しにくくなります。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

こういう状況であれば、「うん、もう子どもは作らなくてもいいかな」というトレンドが ―― もちろん、そういう考え方は以前からありましたが ―― もっとマジョリティー（多数派）になっても良いような気がします。

ところが、このような意見は、日常生活ではもちろん、比較的本音をさらせるはずのネットの掲示板などでも、かなり少ないのです。それどころか、そのような意見は、女性からですら賛否が寄せられる傾向にあります。それだけ、デリケートな話題であるともいえるでしょう。

さらに近年では、「パートナーはいらない。子ども"だけ"が欲しい」という意見が、一つの勢力として確立しつつあります。



労働によって子どもが作りにくいのに加えて、さらに結婚率すらも低下している状況*)にあって、それでも子ども"だけ"が欲しいという人がいることは、かなり興味深いです。

*）生涯独身率は、現時点において男性2割、女性1割です。今後、増加することは確定的です（参考：外部媒体に移行します）。

その理由について、調べてみました。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

「子ども"だけ"欲しい」の動機

	動機	内容
(1)	タイムリミット	女性の労働は不可避なのに、女性の妊娠可能期間は生物学的に確定(結婚は後でも可)
(2)	パートナー不要	そもそも育児に、パートナー(夫)は役立たず
(3)	おもちゃ	一人で生きて、死んでいくのは、寂しい
(4)	利己的遺伝子	「自分の遺伝子を残したい」という生物的本能
(5)	コスト	結婚は不利益が多いが、出産・育児は利益が多い —— という見積り(思い込み？)

"子ども"は「人生を豊かにする」という、「根拠なき根拠」がベースか？

「(1)タイムリミット」は、非常に理にかなった考え方です。「(2)パートナー不要」というのもかなり本質を突いているような気がします。「(3)おもちゃ」は、長女(19歳)からインタビューした結果です。長女を選んだのは、現時点では「母」でもなく「労働者」でもない「女性」という観点から意見を聞きたかったからです。「(4)利己的遺伝子」は、私が普段から使い倒している思考方法です(関連記事:「抹殺する人工知能 ～ 生存競争と自然淘汰で、最適解にたどりつく」)。

しかし、これら全部をまとめて、最終的には「(5)コスト」(「金」ではなく「価値」という意味)になるのかな、という気がしています。しかし、そのコスト計算には「子どもは、可制御で、人生を豊かにする」という、客観的に検証されていない「思い込み」がベースになっている ―― という気がするのです。しかもその傾向は、圧倒的に女性に多いのです*)。

*)男性でも同じ考えを持っている人はいます。例えば、私の後輩(♂)の研究員は、「嫁はいらんけど、子どもは育ててみたい」と言っています。

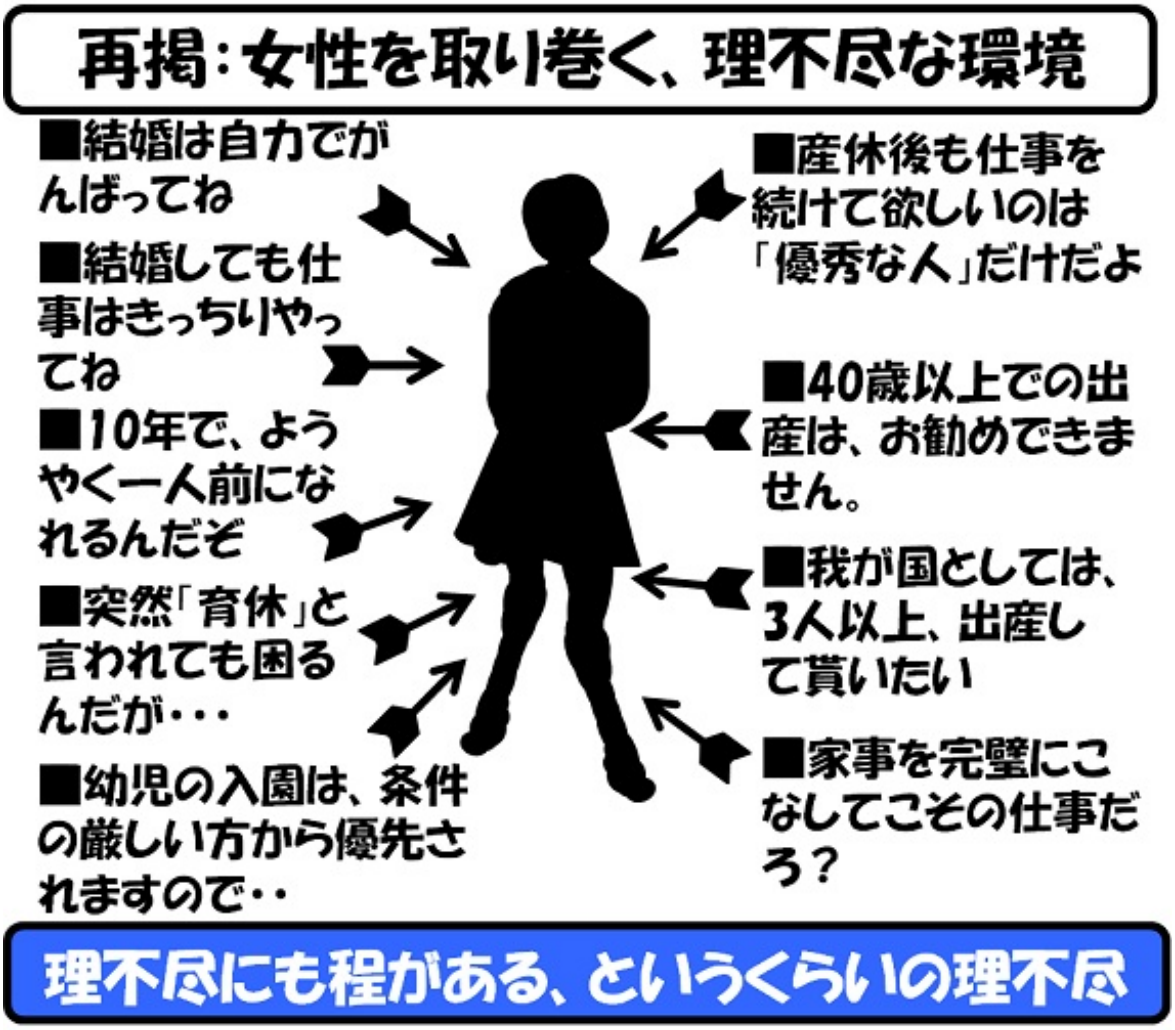
このような「子どもが無条件に欲しい」という個人の思いに、政府が付け込んで……もとい、活用しているのは事実です。

しかし、エンジニア視点を持ち出すまでもなく、「女性活用」とは、「女性を結婚や妊娠から遠ざける」行為そのものです ―― まず、この現実が、(少なくとも私には)政府の白書の行間から

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

読み取れないのです。

　私には、（行政や企業の一定の努力は認めるものの）子どもの育成支援するインフラすら満足に構築・運用もできていないくせに、「女性活用」を女性に押しつけているだけ、という印象が拭いきれません。



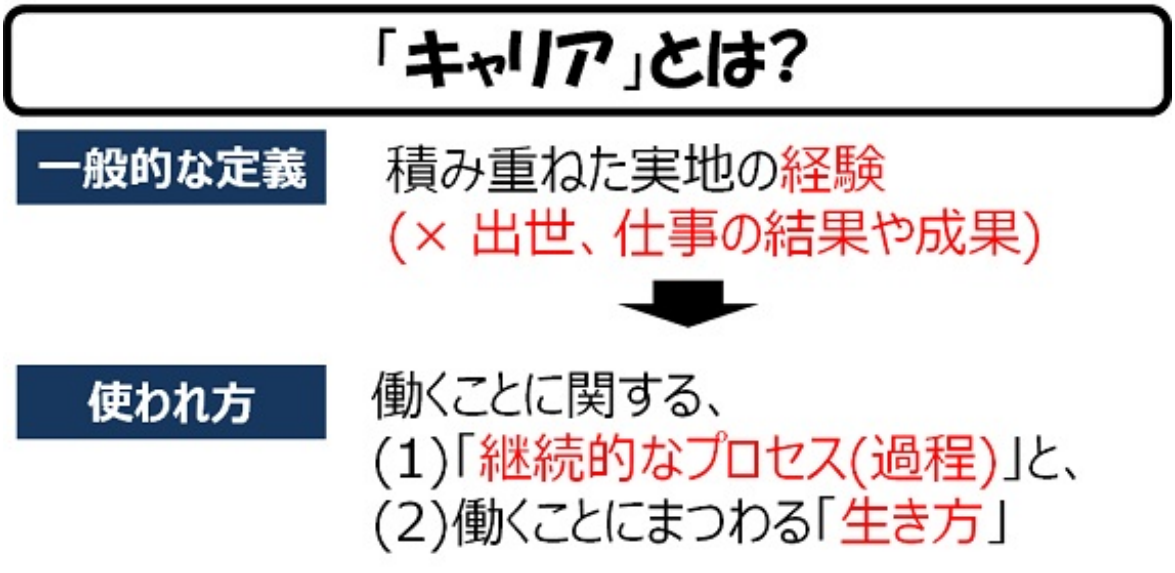
筆者が執筆した、外部媒体の連載記事より再掲

「キャリア」とは結局何なのか

　さて、ここからは「キャリア」の話題に移りたいと思います。

　まず、私、そもそも「キャリア」という言葉の意味がよく分かっていなかったので、この機会に調べてみることにしました。

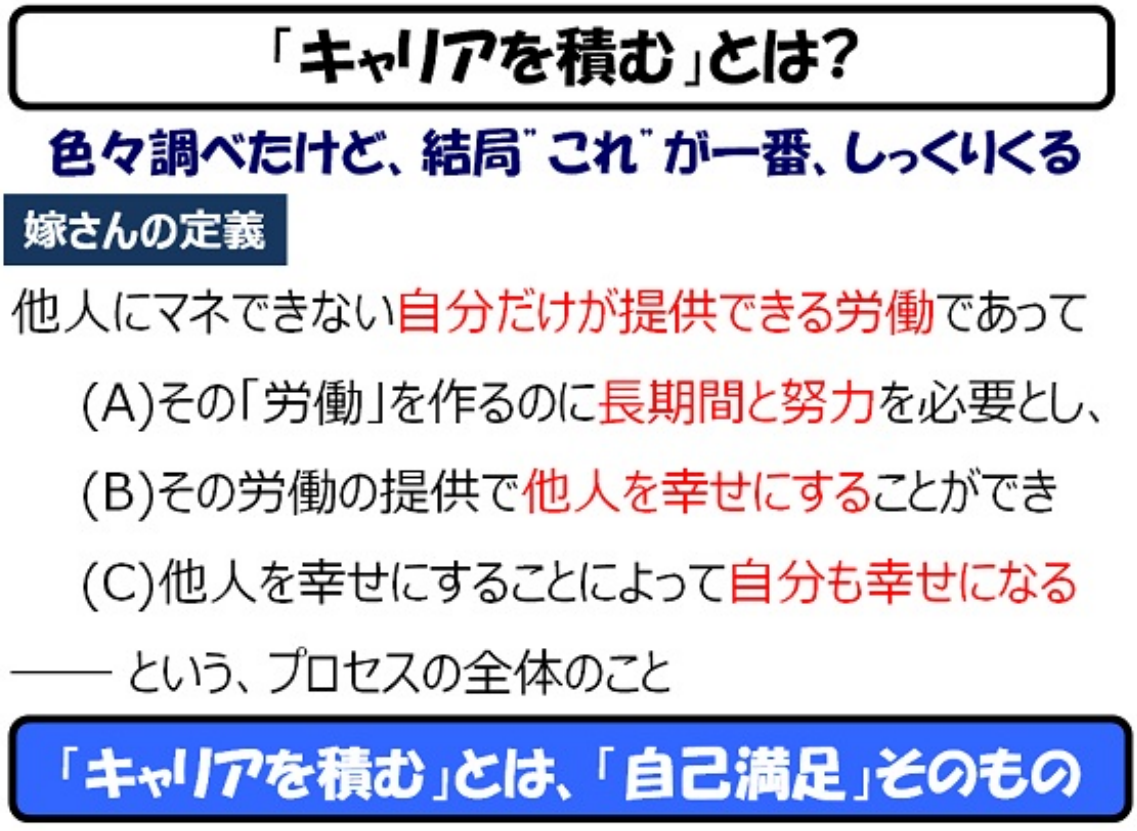
Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.



キャリアというと「出世」のイメージが強いようですが、基本的には「経験」のことです。もう少し丁寧に言うと、働くことの「プロセス」と、その働き方に関する「ポリシー」といえるものようです。

とすれば、「キャリアを積む」とは、「時間方向の経験の積分」という理解で良いはずなのですが、いろいろな資料や書籍を読み込んでみたところ、どうもそういう話でもないようです。

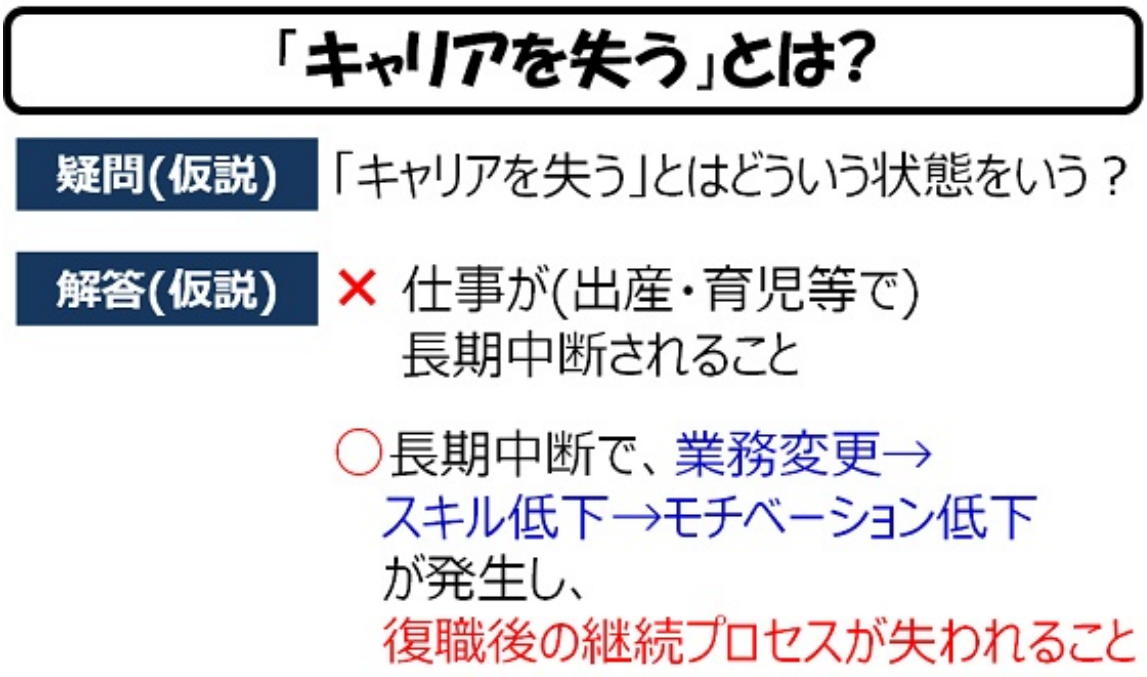
最終的に、嫁さんが定義してくれた以下の内容が、一番しっくりきたので、今回は以下の定義で通します。



Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

つまり、キャリアとは外部から客観的に識別されるものではなく、自分の中で「何か価値がある」「自分の強みである」と、自分自身で自分勝手に定義されるものであり、それを持つことで、「自分に『自信』やら『安心』やらを与える何か」と把握すると、分かりやすいです。

特に、この「女性のキャリア」については、この考え方を用いると非常にクリアに見えてくるのです。例えば、女性における「キャリアを失う」とは、こういう解釈ができます。



女性の労働における「キャリアを失う」というのは、「出世できなくなる」とか「経験値が下がる」という意味よりは、むしろ「仕事が途切れる」という意味で使われていることが多いようです。

「キャリアを失わない」方法はあるのか

私は、女性ではなく、出産の経験もなければ、育児プロセスも含めた、長期間の離職を経験したことはありませんが、それでも例えば ―― 復職後に、「技術職」ではなく、「販売・営業職」を命じられたら“心が折れるだろう”と確信できる ―― という程度には理解できます。

自分が積み上げてきたものが「なかったこと」になり、「最初からやり直す」ということは大変な恐怖であり、想像を絶する絶望があるだろう、と思えます。

そして、それが、「女性である」というだけの、男性にはない理不尽な理由で発生する「恐怖」と「絶望」であれば、「それでも立ち上がれ」というのは、酷に過ぎるというものです。

―― が、その「絶望」と「恐怖」を、一体どれだけの人間が理解できているのか?

その「絶望」と「恐怖」を理解した上で、政府の「働き方改革」は検討されているのだろうか。企業は、その仕組みをちゃんと構築しようとしているのだろうか――。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

これを、ずっと、考えて、考えて、考え続けた結果、私は疲れ果て、最終的に、以下のような「女性が『キャリアを失わない』簡単な方法」に、到達してしまいました。

―― 子どもを産まない、育てない、結婚をしない。以上。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

女性が「キャリアを失わない」簡単な方法

子どもを産まない、育てない、結婚をしない。以上。

そもそもが、「無茶」

	「無茶」の例	具体例
(1)	業務中断中の対策、絶無	復職復帰後の条件・保証なし。そもそも組織改正時の連絡もこない。仕事の進捗報告もない→"孤立化"
(2)	訳の分からん「女性活躍セミナー」	「スーパー著名人」やら「成功した人だけ」が、好き勝手なことを喋って帰るだけのセミナー
(3)	恐しく複雑で面倒な社内制度	「目的も手続も分からない書類」を量産するだけの総務→誰も読めないので、誰も「制度」を理解できない。相談できる人間もいない
(4)	復職時の引き継ぎ方法不明	復職する為の最低限の情報すらもらえない(暗に「復職するな」と言われているのかと思えるほどに)
(5)	参加できない時間帯の会議	「アンタは会議に出てこなくても、構わん」と言わんがごとくの無礼な対応
(6)	気を使い/使われ、疲れ果てる	(Step.1)子どもが病気になれば、休まざるを得ない→ (Step.2)そういう理由での休みを、「困るなぁ」と言える人間は、この世界にはいない→ (Step.3)・・と思うだろうなぁ、と思うと・・・(以下無限ループ)

こんな状況を看過しておいて、「女性活用」を、口にしているんだなぁ

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

「女性活用」が「人口減少を加速するエンジン」になってしまう

　では最後に、「女性活用」のシミュレーション結果を示します。

　政府の「働き方改革」の「女性活用」の目的は、労働人口の増加です。少子化によって、税収入は減少する一方で、高齢化によって支出が増大しているからです。

　しかし、既に前述した通り、「女性活用」とは女性を結婚や妊娠から遠ざける」行為そのもので、人口減少を加速するエンジンそのものとも言えます。

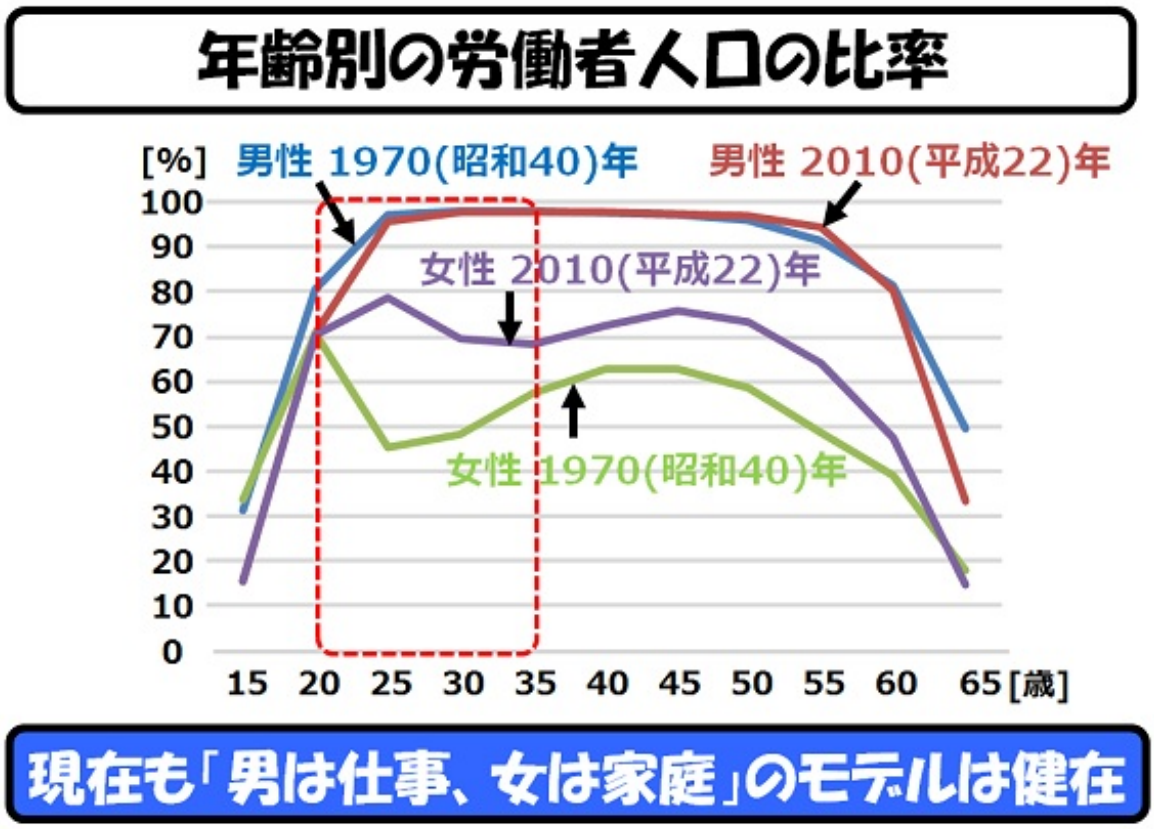
　しかし、今さら、高度経済成長時代の「性別役割分担」というドクトリンに立ち戻ることはできません。「性別役割分担」ドクトリンは、全ての国民が結婚して家庭を持つことが大前提ですが、既に、「国民の総てが『結婚→家庭→出産』を選択すること」自体、前提条件として成立していません ーー「サザエさん的家庭観」は、とっくに崩壊しているのです。

　では、(1)「女性活用」を推進しつつ、かつ、(2)税収の元となる労働人口を増やす、というミラクルの可能性が、たとえわずかでもあるのでしょうか ーー では、ここから、江端シミュレーションを発動してみましょう。

　本シミュレーションでは、高度経済成長時の1970年と、2010年の国勢調査結果を基本パラメータとして使いました。

　まず、年齢別の労働者人口の比率を見てください。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

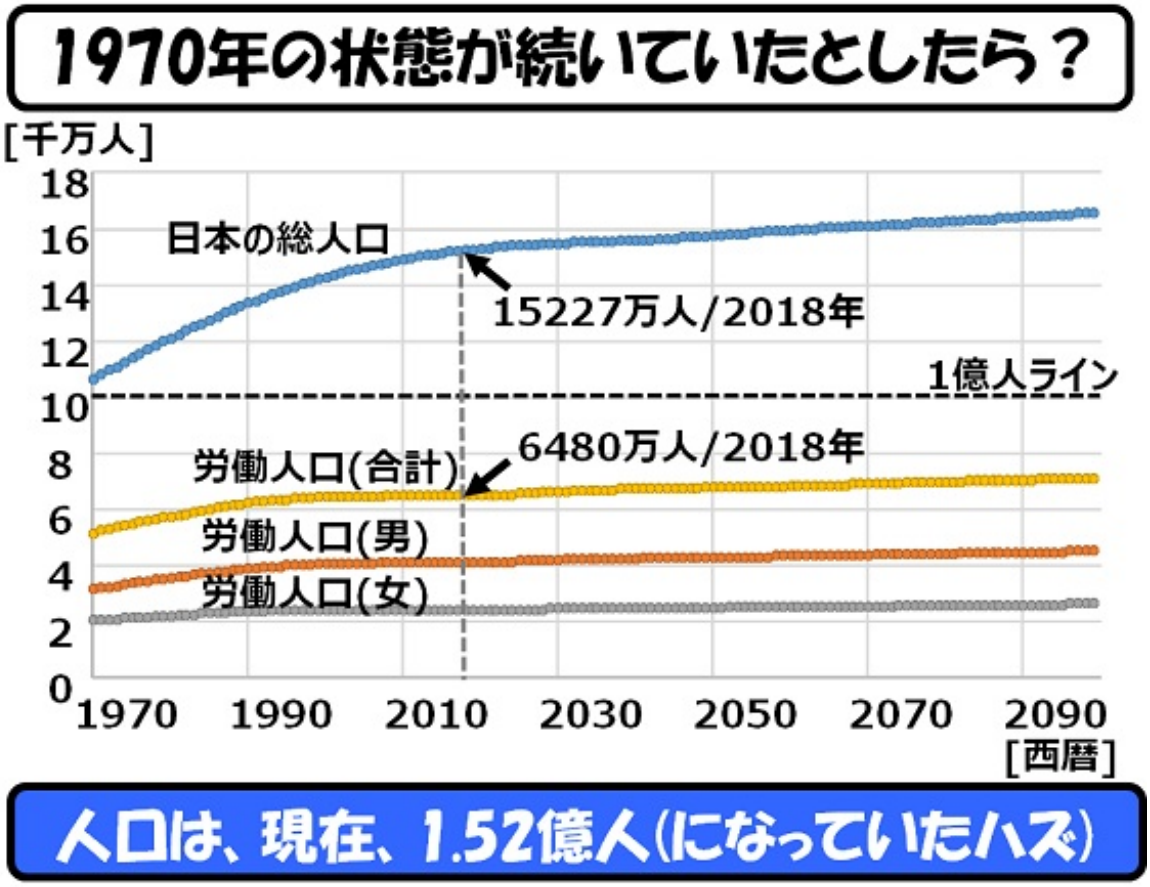


これを見ていると、男性はこの40年間、全く変化なく、ほぼ100%の男性が、報酬型の労働に従事していることが分かります。一方、女性の方は、若年時に比率が高く、ある年齢になると比率がガクンと減少し、その後、徐々に増加するという「M型」という形になっています。

これは、比率こそ違えども、今なお、「男は仕事、女は家庭」のモデルが継承されていることを示しています。

さて、こんな計算には意味がないことは、十分に分かっているのですが、もし「1970年」の「性別役割分担ドクトリン」と、それが許される外部環境（朝鮮戦争が継続中で、日本の円安が維持され続けていて……）が維持され続けたら、一体どうなっていたんだろうか、と思い、上記の労働者人口の比率と、1970年の合計特殊出生率（2.13人）を使って、シミュレーションしてみました（ソースコードはこちら）。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

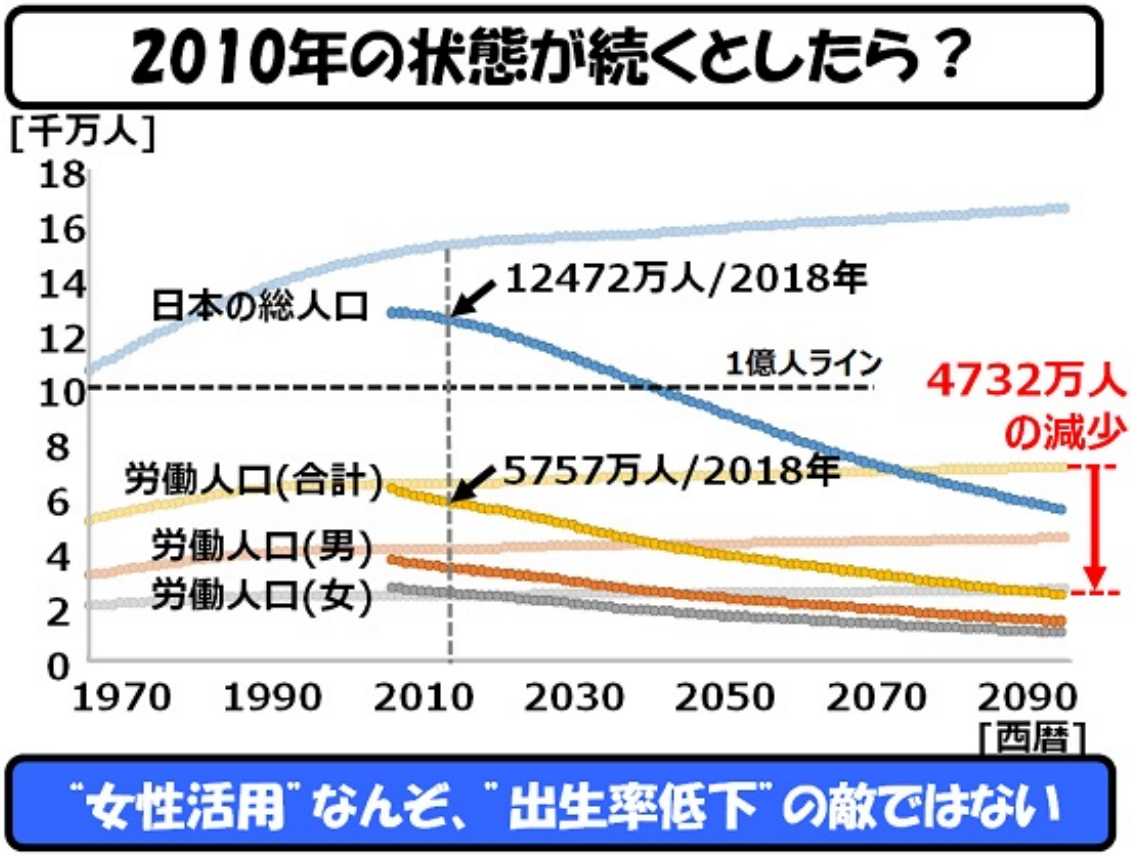


日本の人口は、今より2500万人ほど増えており、少なくとも労働人口については不安はない状態ではあるようです（まあ、別の問題（食料問題とか、住宅問題とか、インフラ不足とか）が生じていたとは思いますが）。

「0.82」という数値

さて、次に2010年の状態が、固定されて、2100年まで続くとしたら、どうなるかを、先ほどのグラフの上に重ねてみました（ソースコードはこちら）。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.



ここで一つ言えることは、労働人口問題に関して、

――「女性活用」の施策は、出生率低下（2.13→1.44）の前には、ほとんど「風前のともしび」程度の効果しかないという事実

です*)。

正直、計算結果を見た私自身が衝撃を受けて、パソコンの前で呆けてしまったくらいです。

ですが、「無いものねだり」をしても仕方ありません。「女性活用」の施策しか活路を見いだせないのであれば、そのフィールドで闘うしかありません。

しかし、前述したように、「女性が働く」ということは「女性が子どもを産めない」ということです（ここを、言葉で飾ってみたところで、仕方がありません）。で、問題は、女性が働くことによって、どのくらい女性が子どもを産めなくなるのか、ということです。

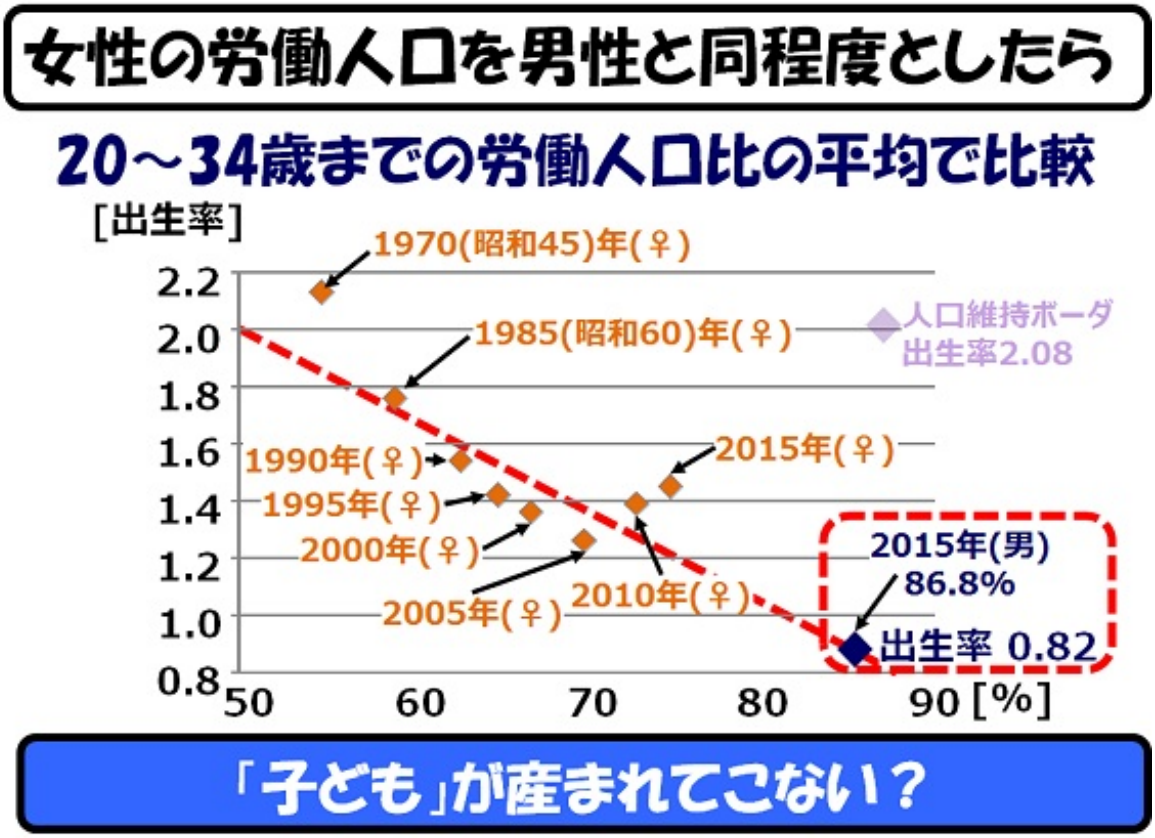
そこで、「労働人口比率と出生率は関連がある」という仮説を立てて、エクセルを使って回帰分析を行い、その相関が最も高くなる期間を調べてみました。

手当たり次第計算を試みてみたところ、女性の「20～34歳までの労働人口比の平均値」と、「合計特殊出生率」の相関が、"0.8以上"の高い値となりました*)。この結果から、出生率と、女性の結婚年齢には、強い相関があることも推認されます。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

＊）統計的には0.7以上あれば、「かなり強い相関がある」と評価できます。特殊出生率の拠出根拠である15～49歳の他、15～29歳、20～49歳なども調べたのですが、相関係数は全て0.7を切ってしまいました。

この相関関数を使って、回帰直線を引き、さらに、2015年の国勢調査結果を使って、女性の労働人口比率を、男性と同じになる未来を想定してみました。要するに、女性を男性のように働いてもらう仮想世界を作ってみることにしたのです。



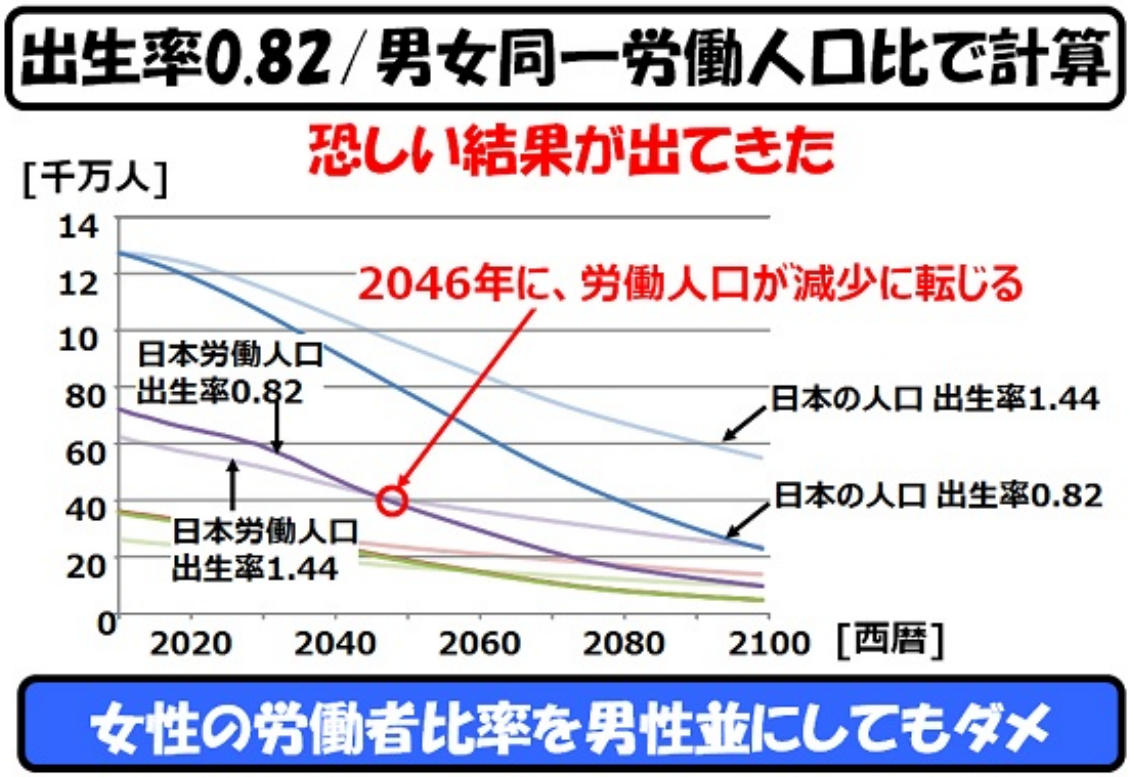
―― 出生率0.82人

1人の女性から2人の子どもが産まれてこないと、その国は人口を維持できません（正確には、人口を維持するボーダーラインは、出生率2.08人といわれています）。

この未来からは、1人の女性から1人の子どもすら産まれてこないことになります。こんな恐しい値"0.82"は、私が知っている限り、現時点で世界中のどの国にもなく、そして、歴史上一度も登場したことはありません。

そして、この"0.82"をシミュレーターに突っ込んでみたら、さらに恐しい結果が出てきました（ソースコードはこちら）。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.



確かに、「女性活用」を推進すれば、確かに労働人口は増えます（シミュレーターは、「現時点で500万人くらいは行けそう」という結果をたたき出しています。政府の白書では、実測値として150万人増という記載がありました）。

しかし、女性の労働人口比を上げることによって、逆に、出生率の方は、壊滅的な損害を受けます。この結果、私のシミュレーションでは、2046年に労働人口の増減の逆転現象が発生しています。

そして、2100年における日本の人口は、現在の状況を維持したとして2370万人（これでも相当にひどいです）ですが、女性活用を極める（男性と同程度の労働人口比率とする）ことによって、1009万人と半減以下となってしまうのです。

労働人口と出生率に線形の関係が成り立つか不明ですし、また出生率0.82などという、ぶっとんだ結果が本当に出てくるか、と言われると、シミュレーションを実施した私自身すら信じたくないです。

しかし、私の試みた簡易かつ単純なシミュレーションでは「女性活用」からは、絶望的な未来しか出てきませんでした。『だからこそ、男性の育児参加（イクメン）*）や、生産率の向上**）が必要なんだ』――「『女性活用』の周辺環境」が重要だ ―― という意見が出てくるのは当然です。

*）、**）ところで、私、この「イクメン」とか「家事を手伝う」とか言うフレーズが嫌いです（著者ブログ）。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

今回、私は、あえてこれらの「『女性活用』の周辺環境」を加えた計算を省略致しました。多分、次々回に予定している「子育て、介護、障害者就労」で、皆さんに、私が省略した理由をご理解いただけると思います。

ところで、政府のシンクタンクは、当然、この程度の計算は完了している（いますよね？）と思いますが、それでも市井の一週末研究員としては、

―― 働き方改革の「女性活用」ついては、超高精度な制御装置を取り扱うような（原子炉の臨界制御くらいの）慎重さで運用を進めていただきたい

と、それを願うばかりです。

今回のまとめ

それでは、今回のコラムの内容をまとめてみたいと思います。

【1】政府主導の「働き方改革」の重要項目の1つである「女性活用」について検討を行いました。

【2】明治維新後から現代に至るまでの、「女性の労働」の歴史を、労働力、母性保護、女性の権利という観点から纏めてみました。この結果、女性がわが国の近代化と戦争継続能力を維持し続けるだけの労働力を提供してきたこと、また、戦後の母性の保護と、高度経済成長が、現在の女性の労働問題の根の部分となっていることを明らかにしました。

【3】働き方改革における「女性活用」の最大の障害物が「子ども」であると断言した上で、この「子ども」に対する執着が（今の私には）説明不能であること、そして、国家は、働き方改革において、この私たち（特に女性の）「子ども」に対する執着に付け込んで（あるいは、うまく活用して）いることを明らかにしました。

【4】女性の労働における「キャリア」「キャリアを積む」「キャリアを失う」の意味を分析した結果、それが極めて主観的なものであり、「自分に『自信』やら『安心』やらを与える何か」と把握すると、非常に分かりやすくなることを示しました。さらに、女性が「キャリアを失わない」簡単な方法は、「子どもを産まない、育てない、結婚しない」であることを、（かなり切れ気味に）説明しました。

【5】「女性活用」とは人口減少を加速するエンジンそのものであると、はっきりと言い切った上で、1970年と2010年（2015年）の国勢調査のデータを使って各種のシミュレーションを実施しました。その結果、「女性活用」は、その運用を誤れば、国家を消滅させかねない結果を導くかもしれないことを、数字で明らかにしました。

以上です。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

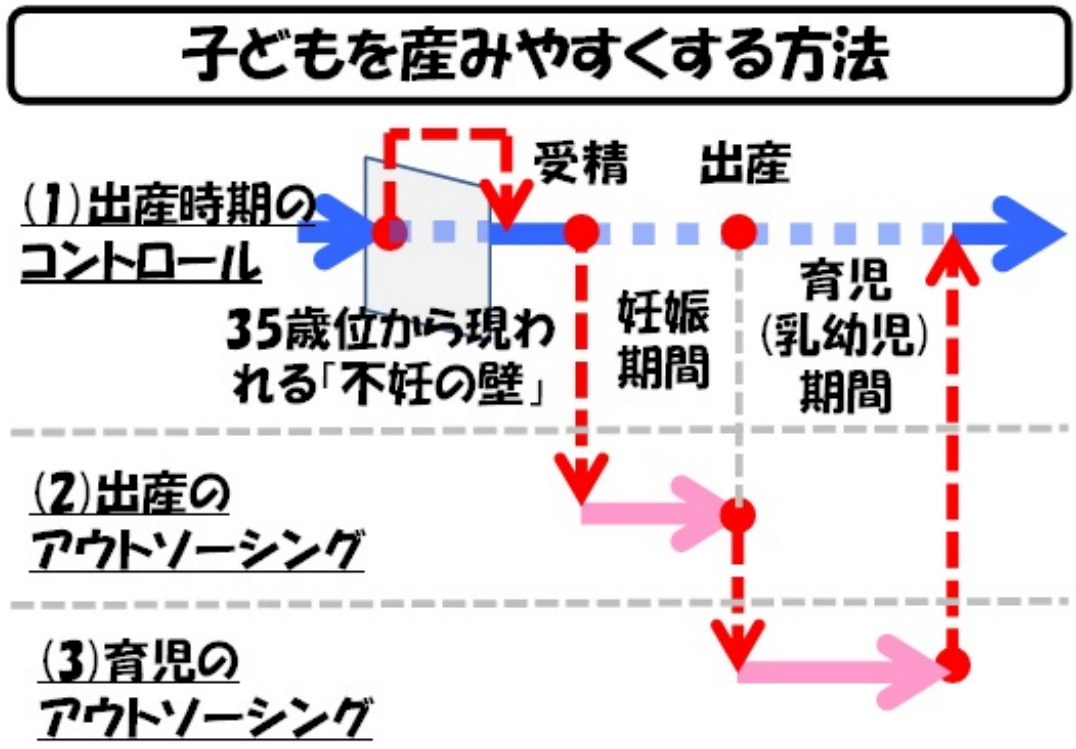
「女性活用」を100%の確率で成功させる方法はあります。

―― 出産を母体で行わず装置で行い、育児を自分で行わずアウトソーシング（外注）する*)

参考記事：外部媒体に移行します。

です。

しかし、以前、この提案をしたことがあるのですが、読者に完全に無視されました（"炎上"すらしませんでした）。



筆者が執筆した、外部媒体の連載より再掲

でも、これって、そんなにダメでしょうか。少なくとも、私の家族には絶不評でした（私を除き3人全員が女性）。

「母性を前提としない（母体から産まれる、母体が痛みを伴わない）子どもは、愛のない子どもになる」というものが、圧倒的だったように思えます。

しかし、これは論理的ではありません。

その理屈でいけば、「父親の愛は、どこまで行っても『本質的でない』」とか、「養子の子どもは、本質な愛を受け得ない」という話になりかねない ―― などというイチャモンをつけたいわけではないのです。

私たちは、機械で子どもが産むことが「気持ち悪い」のであって、機械が子どもを育てるの

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

が「不快」なのです（同じようなことが、体外受精（いわゆる「試験管ベビー」）の時にもありましたが、2015年の段階で、我が国の赤ちゃんの約20人に1人は「試験管ベビー」です）。

私は、この「気持ちが悪い」「不快」には、山ほど立ち会ってきたので、その心理が発生するプロセスを良く知っています（ぜひ、私のもう1つの連載「Over the AI ――AIの向こう側に」もご一読ください）。

それでも、私たちは、この「気持ち悪い」「不快」を乗り越えて、「向こう側に」行かなければならない時期ではないか……とも思うのです。

もちろん、それを乗り越えないまま、穏やかな国家の死（引いては人類の死）を、静かに待つというのも、また一つの選択だとも思いますが。

それでも、どのようなプロセスであれ、「生まれてきたことは幸せなことだ」と思えること。――例え、『生まれてこなければ、こんな辛い目にも合わなかったのに』―― と思えることばかりの人生であっても、「そう思える器（自分の実体）がある私」は、「そう思える器がない私」よりは、いいんじゃないかなー、と思うのです―― 少なくとも私は。

※なお、今回のデータはこちらに置いておきましたが、江端への問い合わせはご遠慮ください。データを使いたい方は自力で内容を解読してください。

「今回のコラムには、血のにじみ出るような迫力がありません」

後輩：「江端さんが、コラムで、こんな悪質な『叙述トリック』を使うとは ―― 軽蔑しますよ、江端さん」

江端：「叙述トリック？どこに？」

後輩：「気がついて使っていないなら、さらに悪質ですね。今回、江端さんが使っている「女性」は、（1）近代国家における全体としての女性、（2）子どもが欲しいと切望する女性、（3）キャリアを維持したい欲しい女性、（4）2100年までの労働力人口としての女性、（5）人工生殖（出産、育児の完全機械化）を容認しても子どもが欲しい女性の5種類ですよね」

江端：「まあ、そうなるかな」

後輩：「これらの5種類の女性はいずれも、女性の母集団の大きさはもちろん、その個人の状況やポリシーが、全てバラバラであり、一緒くたに論じることはできないハズです。にもかかわらず、江端さんは、それらの説明を全部省略して、全部同一の「女性」として取り扱っており、読者を、江端さんの持論に強制的に導き込む、悪質なトリックを駆使しているじゃないですか」

江端：「あ……（そうかも）」

後輩：「まだあります。江端さんは、エンジニアリングアプローチで、出産や育児の意義を、経験則的（帰納法的）手段を持ちいて、その理解を試みようとしていますが、これも「帰納法的ロジッ

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

ク詐欺」とも言えるもので、エンジニアや研究者が無意識に使っている暴力的な思考手法です」

江端:「……よく分からないのだけど」

後輩:「人生において、「出産・育児」のチャンスは、ゼロ回または数回以内しかありませよね」

江端:「その通り」

後輩:「『帰納法的ロジック』は、自然法則 ―― 100回実験すれば、ほぼ100回同じ結果を得られる自然界の法則 ―― を前提としている訳です」

江端:「うん、知っている*)。それで?」

*)「発明とは、自然法則を利用した技術的思想の創作のうち高度のものをいう」(特許法第1条)

後輩:「人生で100回くらい「出産・育児」を体現できるのであれば、『帰納法的ロジック』を使えるかもしれません。しかし、世の中の事象の99.9%以上は、過去において経験がなく、未来においてその予想が全くつかないものです。エンジニアリングアプローチが適用できる対象は、恐しく少ないのです ―― 少なくとも「出産・育児」には使えません」

江端:「……」

後輩:「だから、私たちは、社会の問題を『経験則』ではなく、正義とか哲学とか倫理とかいう概念を挿引して、その場限りの一般解を導くしかないのですが、どうやら、江端さんは、その発想にすら至っていなかったようですね ―― まったく、何やっているんだか」

江端:「……しかし、その理屈を拡大すると、この「女性活用」を含めてほとんどの問題は、不可知論に陥いるだろう? だからこそ、『帰納』でも『演繹』でもない、第三のアプローチ『計算』を導入していることに、この連載コラムの意義があるんだと思うんだ」

後輩:「江端さんの計算結果の多くは発見的であり、衝撃的ともありますが、しかし、江端さんが数値に込める『魂』とは、一体何なんですか?」

江端:「ああ、それは、はっきりしている。『私たちは変化したくない』を最高の価値であると仮定した時の『アンチテーゼ』の提示だよ。何しろ、私たち人間は、席替えやクラス替えすらも回避したがる、超保守的な生き物*)だからね」

*)参考:著者のブログ

後輩:「なるほど。人口が減少して、労働力が失われ、税収が減って、インフラ保守が不可能となった日本 ―― そういう国家レベルの席替えやクラス替え ―― を『見える化』するということですか」

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

江端:「ま、そういうこと」

後輩:「だとしても、です。今回のコラム全体として、血のにじみ出るような迫力がありません。特に数値問題については淡々と問いているだけであり、これをわざわざ計算する必要性を、魂のレベルで感じられないのですよ」

江端:「そうかな?」

後輩:「正直に言えばですね ーー家族の構成員が全部女性でありながら、女性の心の叫びをキャッチできない江端さんって、アホなんじゃないんですか? ーー って思っています」

「輝く」よりも「生きやすさ」を(編集担当より、今回のコラムに寄せて)

江端さんからのお勧めを受けて、女性という立場で、今回のコラムのテーマについて記載してみます。

細かく言うと大変なので、「いろいろ言いたいこと」を1文にまとめるとするならば、「ーー「女性が輝く社会作り」という政策によって、1人の女性としての生き方・幸せの形が、「型」にはめられているような気持ちになる」ということです。これは、江端さんの記事にある、「女性を取り巻く、理不尽な環境」の図に集約されています。

個人的には、「女性の活躍」政策でやろうとしていることは、政策としては絶対に必要だと思いますし、きちんと考えてもらえることは有難いことでもあります。ならばなぜ、「女性の活躍」政策が、こんなにもストンと胸に落ちてこず、理不尽に感じるのかーー。

それは、政府が掲げている女性が活躍する社会作りの「女性」は、「仕事も、子育ても、家事も完璧なスーパー既婚ウーマン」を想定しているように見えるからではないでしょうか。周りの友人(女性)の意見でも、これは多いです。そもそも、結婚や妊娠をはじめ、自分1人ではどうしようもなかったり、不可抗力だったりすることも、人生にはたくさんあります。そういうこと、ちゃんと分かってる? と問いたいのです。

江端さんからいただいた1つの仮説ですが、政府は助成を、労働力の基盤(×補助的労働力)に据えないと、生産性を維持ができない、という試算でも完了しているのでしょうか。故に「スーパー既婚ウーマン」を想定しないと、生産性の総量(×労働力人口数)を担保できないと見なしているのでしょうか。

個人的には、「女性が輝ける社会」というベクトルが少しずれているのではないかと感じています。もちろん、「輝きたい」と思っている女性もとても多いとは思います(女性向け雑誌がそういうコピーであおっている気も)。ですが私は、定義の仕方としては「輝く」よりも「生きやすい」ではないかなと思うのです。

「女性が生きやすい」。小さなことでもいいのです。身近な風景で言うならば、通勤電車の優先席で大また広げて眠りこけるのではなく、妊婦さんに席を譲る。ベビーカーやスーツケースを運ぶのを手伝う。こういうことが、脊髄反射的にさらっとできる人が増えるだけで、ずいぶんとラクになります(お子さんがいる女性の先輩記者は、ベビーカーを運ぶとき積極的に手伝ってくれるのは女性だと言っていました)(参考:著者のブログ)。男性の育休を「義務」にしてみるとか。仕事の最前線から離れることへの不安を「定量化」して、家事という膨大な仕事の量を「見える化」するとか……。できることは、たくさんあると思うのです。

だから、私は、政府、企業、そして男性の皆さんに伺いたいのです。

ーー 白書とか予算とか整備とか制度とか、それ自体を目的にしていませんか?

とーー。

「こんな風に生きたい」。そう思ったときに、周囲の十分な理解とさまざまな選択肢がある社会(女性にとってだけじゃなく全員にとって)になってほしいと思っています。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

⇒「世界を「数字」で回してみよう」連載バックナンバー一覧

Profile

江端智一（えばた ともいち）

日本の大手総合電機メーカーの主任研究員。1991年に入社。「サンマとサバ」を2種類のセンサーだけで判別するという電子レンジの食品自動判別アルゴリズムの発明を皮切りに、エンジン制御からネットワーク監視、無線ネットワーク、屋内GPS、鉄道システムまで幅広い分野の研究開発に携わる。

意外な視点から繰り出される特許発明には定評が高く、特許権に関して強いこだわりを持つ。特に熾烈（しれつ）を極めた海外特許庁との戦いにおいて、審査官を交代させるまで戦い抜いて特許査定を奪取した話は、今なお伝説として「本人」が語り継いでいる。共同研究のために赴任した米国での2年間の生活では、会話の1割の単語だけを拾って残りの9割を推測し、相手の言っている内容を理解しないで会話を強行するという希少な能力を獲得し、凱旋帰国。

私生活においては、辛辣（しんらつ）な切り口で語られるエッセイをWebサイト「こぼれネット」で発表し続け、カルト的なファンから圧倒的な支持を得ている。また週末には、LANを敷設するために自宅の庭に穴を掘り、侵入検知センサーを設置し、24時間体制のホームセキュリティシステムを構築することを趣味としている。このシステムは現在も拡張を続けており、その完成形態は「本人」も知らない。

本連載の内容は、個人の意見および見解であり、所属する組織を代表したものではありません。

関連記事

政府vs企業で揺れる「副業」、労働者にメリットはあるのか
「副業」は、それを推進するか否かにおいて、政府と企業のスタンスが（珍しく）対立する項目です。人口の減少が深刻な今、政府が副業を推進するのも分かる気はしますが、当事者である私たちが知りたいのは、これに尽きると思います――「結局、副業ってメリットあるの？」

「iPhone X」の密かな勝者たち（前編）
これまで、「iPhone X」の分解では、ロジックICに焦点が当てられてきた。今回は、それ以外の“勝利者”を取り上げてみたい。

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

誰も知らない「生産性向上」の正体 ～“人間抜き”でも経済は成長？

「働き方改革」に関連する言葉で、最もよく聞かれる、もしくは最も声高に叫ばれているものが「生産性の向上」ではないでしょうか。他国と比較し、「生産性」の低さを嘆かれる日本ーー。ですが、本当のところ、「生産性」とは一体何なのでしょうか。

人類は、“ダイエットに失敗する”ようにできている

今回から新シリーズとしてダイエットを取り上げます。ダイエットーー。飽食の時代にあって、それは永遠の課題といっても過言ではないテーマになっています。さて、このダイエットにまつわる「数字」を読み解いていくと、実に面白い傾向と、ある1つの仮説が見えてきます。

儲からない人工知能 ～AIの費用対効果の“落とし穴”

AI技術に対する期待や報道の過熱が増す中、「抜け落ちている議論」があります。それが、AIの費用対効果です。政府にも少しは真剣に考えてほしいのですよ。例えば「荷物を倉庫に入れておいて」と人間に頼むコスト。そして、AI技術を搭載したロボットが「荷物を倉庫に入れておく」という指示を理解し、完璧にやり遂げるまでに掛かるトータルのコスト。一度でも本気で議論したことがありますか？

「AIは最も破壊的な技術領域に」 Gartnerが分析

Gartner（ガートナー）は、「先進テクノロジーのハイプサイクル：2017年」を発表した。この中で、今後10年にわたってデジタルビジネスを推進する3つのメガトレンドを明らかにした。

Copyright © ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

ITmedia Inc.

Copyright (c) 2018 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.